

聖女の結婚

策士策に溺れる

夏目翠

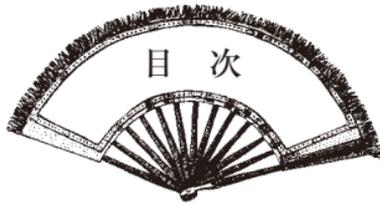
Sui Natsume

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。



序 章	拾った“仔犬”	7
第一章	借金取りの聖女	19
第二章	招かれざる客たち	43
第三章	血の平野を切り拓いた家	81
第四章	呪われた首飾り	109
第五章	黒を抱く者たち	137
第六章	運命は廻りはじめる	166
第七章	愛憎の果てに	192
第八章	主としての矜持	207
終 章	始まりは遺言から	235
	あとがき	252



聖女の結婚

策士策に溺れる

序章 拾った 仔犬

リリアナ・マードックは困っていた。

その証拠に、ふつくらとした艶やかな唇から悩ましい吐息が漏れる。

少しうつむいた拍子に、顔の上半分を隠す白い仮面がずれた。それを、白魚のようなたおやかで細い指が元に戻す。

仮面に覆われていない箇所ほおの頬は白く、そばかす一つない。つつましく結われた黒っぽい焦茶色の後れ毛が、彼女の動きに合わせて揺れている。

仮面の下には、髪と同じ色の長い睫と、眼窩がんかにひそむ鳶色の瞳が隠されていた。もし仮面がなければ、その瞳が虚空を彷徨っているのが見えただろう。

この世に生を受けて二十四年。五歳のとき流行

病で父と兄弟がなくなり、共に病を免れた母も八歳で失っている。その後、親戚を盪回しにされたリリアナは人生の苦汁も辛酸もたいがい舐めてきた。しかし今、リリアナが直面している危機はこれまでの比ではない。

乗り越えなければ、まだ九歳だった自分を引き取ってくれた恩人で、十六歳からは夫であった人が遺してくれたものすべてを失うことになる。そのためにも――

リリアナは、机を挟んで目の前に座る少年を見つめた。

歳の頃は十五歳かもう少し上かもしれない。まだあどけなさは多少残っているが、きれいな鼻筋と形のよい唇は彼が将来女性に困らないことを約束していた。少し眼差しが鋭すぎる気もするが、危険な匂いに惹かれる女性もいる。ただし、身長は伸びきっておらず、今の背丈はリリアナとあまり変わらない。濡れた金髪から滴がぼたぼたと垂れているのは、

風呂から逃走してきたせいだ。身に付けているのは腰に巻いたタオルだけ。

「毛布を貸してやって」

「かしこまりました」

リリアナの側に控えていた執事のヴァレンティンが寒さに粟立った肌に毛布を掛けてやると、少年は牙を剥いた。

「あんた、誰だ？」

色鮮やかな碧眼が警戒心を剥き出しにして、切り込むようににらみつけてくる。

リリアナは苦笑を堪えて、口を開いた。

「人に名前を聞くならば、まず自分が名乗るのが礼儀ではなくて？」

「顔を隠しているような奴に、誰が名乗るか」

少年はリリアナの仮面が気に入らないらしい。

「これは失礼」

「いけませんっ」

躊躇いなく仮面を外そうとして、ヴァレンティン

に止められた。

「いいのよ。あたくしはこれに決めたわ」

「はい……？」

リリアナの決断に驚いたヴァレンティンは一瞬、大きく目を見開いたが、それ以上異を唱えることなく、大人しく後ろに下がった。

外した仮面を卓上に置いてから、リリアナは改めて少年に向き直る。

「あたくしはリリアナ・マードック。セスナ男爵家であなたを見つけて、あたくしの家に連れてきましたの。なぜ、監禁されていて？」

「……それは面倒かけたな」

少し頬が紅潮している。仮面を取ったリリアナに見惚れていたことを恥じているのか、少年はすぐうつむいてしまう。質問には答えなかった。

だから、リリアナは問い方を変える。

「何なら、送ってさしあげましょうか。お家はどこ？」

リリアナが体を倒して下からのぞき込むと、少年はのけぞった。相変わらず、頬は赤いままだ。

「……ない」

「え？」

聞き取れなくて尋ねると、苛いらだ立ったような少年の声が返ってきた。

「だから、家はないんだっ」

「どうして？ ご家族の方は」

率直な問いかけに、少年は少し息を呑のんだ。

「……母は病気で亡くなっているから」

「もしかして風土病？」

昔から、数年おきにこの国に蔓延まんえんする病魔を上げる。はつきりと答えてはもらえなかったが、その沈黙こそが答えだった。

「家族はいないというわけね」

リリアナは改めて、目の前の少年を観察する。

少年の見てくれは悪くないどころか、かなり上等だった。見つけたときは薄汚れていてわからなかつ

たが、こうして泥どろを落としてみると、きれいな金髪に、顔立ちも整っている。

そのうえ、身寄りもないとききた。これぞ神の采配さいはいだと、リリアナは口元に微笑ほほえみを浮かべる。

「あなた、あたくしの犬になりませんか？」

「はあ？」

少年は見るからに不快そうに、眉まゆをひそめた。

「ごめんなさいね。言い間違えましたわ」

「……どうやったら、そんな間違いができる」

リリアナが謝つても、少年は慥然ぶぜんとしていた。

犬というのは何気なく口にしてみたが、案外、的を射ているのかもしれない。初めて顔を合わせたばかりのリリアナに警戒して牙を剥く姿が、どこか獣けものっぽいのだ。

もちろん、言い間違いは故意にやった。少年の反応を見るために。あまりに素直な様子に、リリアナはほくそ笑む。

「あなた、いくつ？」

「……聞いてどうする」

慎重に問い返す少年に、リリアナは扇を煽いで大人の余裕を見せた。

「ただ、あなたのことが知りたいと思ひまして。いけません？　いくつですの？」

「何なんだよ、さつきから！」

「リリアナさま！」

少年が不愉快を顕にして立ち上がると、リリアナを守ろうとヴァレンティンが前に出る。

「ヴァレンティンは下がっていて」

扇を軽く叩いて命じると、忠実な執事はふたたび大人しく引き下がる。だが、少年を牽制することは忘れなかった。

明らかに自分より力のある大人の男ににらまれたというのに、少年には臆するところが見られなかった。根性は備わっているようだ、リリアナは満足する。

「あたくしとしても興味本位なつもりはありません

わ。とにかくお座りください」

「オレは——」

「座りなさい」

リリアナが鳶色の瞳に力を込める。色合いのせい、目を細めると猛禽類を思わせるような鋭さが表に出た。厳しい視線に気圧されたように、彼はようやく腰を下ろした。

「お茶でも飲んで気を鎮めてくださいな」

まだ湯気の立っているお茶を勧めると、少年は大人しく口をつける。熱いのが苦手なのか、飲む前に息を吹きかける様子がかわいらしかった。

「あなた、結婚していらつしやる？」

少年が口に含んだばかりのお茶を盛大に吹き出す。リリアナは咄嗟に扇を開いて盾にしたので、事なきを得た。

「大変。新しく入れさせましようか？」

汚れた口元を拭いながら、少年はリリアナを問いだす。

「い、いきなり何の話だっ？」

「大事な話ですよ。結婚はしてらっしゃるの？
しておられないの？」

「できるわけないだろう。オレはまだ十六だ！」

少年の返答に、リリアナは自分の予想が正しかったことを確認する。

この国の法律では、女性は十六歳から、男性は十八歳にならないと婚姻こんいんは認められない。

やはり運命の出会いとほくそ笑みつつも、念のため、もう一つある懸念けんねんを確かめておこうと思った。

「なら、婚約者は？」

「いないが……ちょっと待て。いつたい、どういふつもりなんだ？」

慌てふためく少年を差し置いて、リリアナは「よかつたわ」と安堵あんどの笑みを漏らした。

「ねえ、あたくしと結婚しません？」

「……はあ？」

リリアナの言葉を耳にした少年は、目を極限まで

見開いて、ぼかんと口を半開きになっている。せつかくのきれいな顔が台無しだった。

リリアナとて、初対面の人間に対して告げる言葉ではないことはわかっている。少年への提案は危険すぎる賭かけだった。しかし、やらなければ、リリアナの人生も夢も未来もすべて失ってしまふ。勝つためにはやるしかなかった。

「あなた、行くところがないのでしょうか？ あたくしが家に置いてさしあげます。その代わり、名前を貸していただけませんか？」

「……………」

少年は微動だにしない。

「名目が必要ですよ。あたくしには夫がいるという事実がほしいので」

要求は端的に。それが駆け引きの鉄則だ。

そして、理由をどこまで説明するかは相手の出方次第だが、ひとまずは表面の上澄うぶずみを掬すくう程度にとどめておく。

「……………」

リリアナの気持ち伝わらなかつたのか、彼は相変わらず呆けた表情のまま、うんともすんとも言ううとしない。だから、リリアナは勝手に話を進めることにした。

「それに、結婚といつても今すぐでなくてもいいんですの。とりあえず婚約しましょう」

後ろで控えていたヴァレンティンに向かつて、「教父さまと弁護士に連絡を取ってちょうだい」と言いつける。

かしこまりました、と頭を下げる執事の姿を見て、少年がようやく焦り出す。

「ちよ、ちよつと待ってくれっ」

黙っていては押し切られるとようやく気づいたらしい。少年は慌てて立ち上がり、ヴァレンティンを呼び止めた。

「結婚って誰が」

「もちろん、あなたとあたくしですわ」

口元に笑みを浮かべたまま、リリアナはきちんと音を立てて扇を閉じる。

それを合図に、ヴァレンティンは部屋から出るのではなく、リリアナの背後に戻った。

「そうそう。結婚したからといって、必ずしも一緒に住む必要はありませんの。こちらの事情でしばらくは我慢してもらおうつもりですが、あなたが望まれるなら、他に家を用意してもいいし、浮気をしてもよろしいんですよ」

「なっ……」

少年はばくばくと口を動かすものの、言葉は出てこなかつた。ただ、その場に立ち尽くす。

それもそうだろう。初対面の女にいきなり結婚を迫られて、なおかつ、浮気を勧められたのだ。正常な反応ができるわけではない。

しかし、リリアナとて考えなしに言ったわけではない。切羽詰まった事情があるのだ。こちらの都合を押しつけるわけだから、相手には最大限の譲歩

をするつもりでの申し出だった。だが、物事には限度というものがある。その辺はきちんと釘を刺しておく。

「ただし、あなたが浮気相手との間に作った子どもまで面倒見る気はありませんし、たとえあたくしが先に死んだとしても、あなたに遺産が入ることはありませんわ」

それだけは覚えておいて、と念を押す。

たとえ財産が手に入らずとも、リリアナの提案は家のない少年にとつて悪い話ではないはずだった。少なくとも、毎晩寝る場所には困らないし、食事や着る物にだって不自由しなくなる。

リリアナがじっと見守るなか、少年は大きく息を吐く。

「……あなたはもう結婚しているんだらう？」

リリアナのきちんと結び上げられた髪——既婚女性の証——を見た上でのつぶやきだった。

碧い眼差しから最初の動揺は消えている。

そのことに対して「かわいくない」とは思うものの、これから夫となるべき男としては上出来だと考え直した。

「正しくは結婚していたと言うべきでしょうね。夫は三年前に亡くなっておりますので」

巷で噂される悪名高き自分の呼び名を告げてやると、卓上の仮面に視線をやり、少年はつぶやく。

「まさか、あんたがああ……」

呆然とする少年に、リリアナはくすりと笑う。

「あなたの口にしたあのがどれかは知りませんが、おそらく、あなたの考えておられる通りですてよ」

自分の悪評など、十分すぎるほど知っている。

挑むようなリリアナの眼差しに、少年はふたたび言葉を失った。

「話は以上ですわ。あとはこちらですべて手配しますから……そうそう。あなた、お名前は何とおっしゃるの？」

「……………」

この期に及んで、まだ抵抗を見せる少年に、リリアナは「しかたないわね」と息を吐いた。

「あたくしがつけてさしあげましょうか。ピートはいかが？ 以前飼っていた馬の名前ですけれど」

「ジョシユアだ！」

馬の名前と聞いて少年の血相が変わった。

名前を聞き出すことに成功したリリアナは、にっこりと微笑んで次を促す。

「ジョシユア、何？」

「……ウインガード」

「ふうん」

答えるまでのわずかな間が気にならないわけではないが、リリアナの商売相手にウインガードという名はない。とりあえず、リリアナは領いた。

「まあ、何とかなるでしょう。ヴァレンティン」

「かしこまりました」

有能な執事は手続きの準備のため、今度こそ部屋から出て行った。

「さてと……改めてよろしくお願ひしますね。ジョシユア」

リリアナが差し出した手を、ジョシユアは取るうとはしなかった。

「……気に入りませんか？」

リリアナが苦笑して手を引つ込めると、ジョシユアはさも嫌そうに顔をしかめる。

「当たり前だ。いきなり結婚しろと命令されて、ハインなんて言えるわけないだろうが」

「お礼ならはまかせていただきますのに」

「そういう問題じゃない」

「偽装でよろしいんですのよ？」

「それでもだ」

牙を剥くジョシユアに、リリアナは「あら、残念ですわね」と鷹揚おうように構えてみせる。

「だったら——」

「あなたに拒否権があるとお思い？」

なおも抵抗を見せるジョシユアに、リリアナは

懐ふとろみから首飾りを取り出して、仮面のすぐ横に置く。仮面の無機質な白と首飾りの石の赤の対比が鮮やかだった。

「……」

途端に、ジョシユアの顔色が変わる。青ざめ、握りしめた手はかすかに震えていた。低い声が唇から漏れる。

「……それを返せ」

「随分と古い代物ですわね。それに、高価ですわ。どうしても、あなたのような子どもがこんな物を？」

意地の悪い問いかけに、ジョシユアは答えられない。リリアナはさらに追い討ちをかけた。

「これはあなたの物ではないのでしょうか？」

「オレの物だ！ オレが……」

「盗んだ？」

「……」

視線こそ逸そらさなかったが、ジョシユアは何も言わなかった。だが、その沈黙こそが答えだとリリア

ナは思った。

「警吏隊けいりたを呼んだほうがよろしい？」

「……」

喉のどの奥から搾しぼり出すような声だった。リリアナは囁ささやく。

「婚約してくださるわよね？」

それは確認ではなく、もはや決定事項だった。

弱みをつかまれたジョシユアに逃げ場はない。言うとおりにしなければ、リリアナが躊躇ちゆうちよなく警吏隊を呼ぶことを、彼はきつとわかっている。

それでも、ジョシユアはなかなか頷かない。

突然、結婚を申し込まれて困惑のあまり隙すきだらけだった態度が一変し、油断なくリリアナを見つめている。不用意に近づこうものなら、一息に噛かみついてやると言わんばかりの目つきだった。

苦笑を噛み殺し、リリアナは悠然ゆうぜんとただ待つ。

ジョシユアが何を考えようと、あくまで有利なのはリリアナで、このわずかな時間で覆せるような

綻びはないはずだった。

それでも簡単に「是」と言わないのは、リリアナに対する反抗心か。

互いに見つめ合ったまま、時を刻む音だけが響いていく。そのまま、どれくらい時間が過ぎたのだろうか。いい加減、リリアナが痺れを切らそうとしたとき、ジョシユアがぼつりとつぶやいた。

「……一つ、聞きたい」

穏やかな湖面のような碧眼は、嵐の前の静けさを思わせる。それでも、リリアナは余裕を崩さない。

「どうぞ」

促すと、ジョシユアは小さく溜め息を吐いた。

「なぜ、オレなんだ？」

その言葉は重く、先ほどまでのきんきんと吼える仔犬のような態度とは程遠かった。事態を冷静に把握しようとする聡明さが垣間見える。

「何も昨日初めて会ったような男に頼まなくとも、あんたほどの女なら、よりどりみどりだろう？」

「あら、そう思いまして？」

軽く相槌を打つリリアナの価値を計るかのように、ジョシユアが上から下までじつと見つめてきた。

「悔しいが、あんたは美人だ。意思の強そうな目に、髪の色とは対照的な真っ白な肌。ふつくらとした柔らかそうな唇。細い肢体には不釣り合いな豊かな……」

ジョシユアの視線がリリアナの胸元を捉えたとき、少年の頬がさつと朱に染まる。気まずそうに顔を背けたまま、言葉が続ける。

「どんな野郎も魅了してやまないだろう。何もオレじゃなくても……」

「ありがたいございます。でも、あたくしはあなたがいいんです」

過剰な賞賛に動じることなくにつこり笑って流すと、ジョシユアはむっとした表情で噛みついてくる。

「だからどうして!？」

「……一目惚れ、でしょうか？」

「ふざけるなよ」

わざとおどけて見せたが、軽く一蹴いっしきされてしま
う。しかたがないので、リリアナは肩をすくめて真
面目じめに向き合うことにした。

「あなたくしには今、どうしても夫が必要ですよ。そ
れも、あなたのような夫が」

家も身寄りもない根無し草で、かつ、危険があつ
ても逃げ出さない男——と心の中で付け加えておく。

リリアナは切羽詰まっていた。とにかく一ヶ月以
内に結婚、もしくはそれに相当するような男性を見
つけなければ、今まで築き上げてきたものがすべて
奪われてしまう。

だから、そこらの男では駄目なのだ。

リリアナの言葉を誤解したのか、ジョシユアは悔
しそうに顔を歪ゆがめた。

「……年若いオレなら、言うことを聞かせられるか
らか？」

リリアナが「さあ、どうでしょう」とだけ言うと、
ジョシユアの目が納得できないと訴えてくる。

しかたがないので、リリアナはもう少しだけ説明
することにした。

「あなたがおっしゃるとおり、あなたくしはたくさん
の殿方に求婚されてましてよ？ でも、離婚を前提
とした結婚に領いてくださる方はなかないわ
特に、マードックの莫大ばくだいな財産を前にしては」

亡き夫がリリアナに残してくれた財産は、一人の
人間が一生遊んで暮らしてもなお余りある大金だつ
た。

そんな富を目の当たりにして、変わらない人は少
ない。有り余るお金を前に生活が墮落だらくするだけなら
ともかく、リリアナを殺して独占しようと考えるか
もしれない。

だから、条件をつけた。そして、それをきっちり
守れる者として、ジョシユアを選んだのだ。

この首飾りがある限り、彼は条件を守るはずだ。

暴力を使つてまで、首飾りを取り戻そうとはしないだろう。するつもりなら、ヴァレンティンが出て行った今、やつていた。

「あなたがいいんです。あたくしを煩わづらわせて、足手まといになるような殿方はいりませんわ」

困惑顔のジョシユアに、リリアナは晴れやかに笑つて見せた。

「あたくしがほしいのは時間だけ。一生を共にする夫は必要ありませんの」

リリアナは片手を広げてジョシユアに見せる。

「五年よ」

「え」

ジョシユアは意味がわからないと、何度も目を瞬しばたかせる。

「あなたの時間を五年、あたくしにくださいな。それですべてを終わらせてみせましょう」

婚約期間が二年、結婚期間が三年——それだけあれば、状況は変わる、変えてみせるとリリアナは目

論ろんでいた。

ジョシユアは息を呑み、天を仰ぐ。しばらくしてから、彼はリリアナに向き合い、ゆつくりと口を開いた——


 第一章 借金取りの聖女

十六年前、レアンダール王国南部一帯を治める領主で大富豪のブラッドフィールド家の別邸に、強盗が押し入った。

犯行当日は犠牲祭だったため、召使いの大半は休みをとっており、その隙を衝かれたものと思われる。犯人は当主夫妻と友人の伯爵、住み込みで働いていた召使いを殺害し、高価な首飾りなど金目の物を盗んで逃走した。

盗まれた金品の行方は知れず、犯人の足取りはつかめなかった。

殺された夫妻には生後三ヶ月になる赤子がいたが、消息は不明である。血の匂いに引かれた獣が屋敷に侵入して、赤子を連れ去った可能性が高い。

唯一の生存者である召使いの娘（当時八歳）は頭を打っており、目覚めたときには何も覚えていなかった――

五百年の歴史を誇るレアンダールの王都には、特権階級や富裕層が住まう特別区がある。普段は閑静なその一角、ある屋敷を取り囲むようにして、この辺りの雰囲気に似つかわしくない強面の男たちの集団がたむろっていた。

日暮れ間近の薄闇が、男たちの醸し出す雰囲気をさらに怖くしている。ガス灯の誕生により、闇は昔ほど恐ろしいものではなくなったが、それでも人の心を脅かすには十分だった。

異変を感じているのか、周囲の屋敷からは仕えている召使いの一人として出てこない。窓の向こうから視線を感じても意に介さなかった男たちが、たっ

た一台の馬車の到着でいっせいに姿勢を正した。

馬車の造りは立派だが、華美ではない。御者が開けた扉から姿を現したのは、長い髪をきちんと結い上げ、顔の上半分を白の仮面で隠した若い女性——
リリアナ・マードックだった。

「お待ちしておりやした、姐御」

男たちがいっせいに頭を下げるなか、リリアナは手を差し出した。

中でも一番人相の悪い、左のこめかみに傷痕がある髭面のむさい男がその手を取り、リリアナを出迎える。

「ご苦労さま、ゴンザレス。それから、姐御はやめてと言っているでしょう？」

「すいやせんっ……えっと、マードック夫人！」

「よろしい。ちなみに、裏には何人が回っているかしら」

「五人ほど」

足りなかったかと尋ねるゴンザレスに対して、リ

リアナはかぶりを振る。

「それで結構よ。さすがね」

「ありがとうございます」

自分よりも二十近く年下の小娘に丁寧ていねいに頭を下げる。ゴンザレス自身、十数人という手下を抱えている身分にもかかわらず、リリアナに従っているには理由があった。

この男は荒っぽいことで有名な、下町で幅はばを利かせている用心棒一家の頭だが、友人に騙だまされて借金を背負わされたところを、リリアナに助けられたのだ。

以来、リリアナの忠実な手足として働いてくれるので、大変重宝している。特に、こういう仕事しごとのときに。

リリアナは、ゴンザレスたちに隠れているように命じ、扉を叩いた。

しばらくして、青白い顔をした屋敷の執事が顔を出す。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。